

楽
曲
紹
介

解説=増田良介

7/7
7/10
7/12

アラム・ハチャトゥリアン(1903-1978)は、アルメニア人としての民族意識を強くもっていた作曲家だ。しかし彼が生まれたのは実はアルメニアではなく、現在ジョージアの首都となっている(当時はロシア帝国の一部)トビリシの郊外だった。幼いハチャトゥリアンは、コーカサスのさまざまな地域出身の人々がいる場所で、両親の歌うアルメニア民謡に加えて、ジョージアやアゼルバイジャンなど多様な地域の音楽に触れながら育ったという。本日の演奏会では、そんなハチャトゥリアンの力強い傑作3曲を聞くことができる。なお、『ガイーヌ』とヴァイオリン協奏曲、そして交響曲第2番というプログラムは、ハチャトゥリアンが1963年来日した際に指揮した演奏会とほぼ同じだ。

ハチャトゥリアン バレエ音楽『ガイーヌ』より

バレエ『ガイーヌ(ガヤネー)』は、1939年から1942年10月にかけて作曲され、12月に初演された。物語は、勇気ある女性ガヤネーが、コルホーズ(集団農場)への放火を企む怠惰な夫ギコを告発するという内容で、当時はスターリン時代、しかも戦時中ということもあり、脚本は、芸術的というよりも政治的なものだった。ロマンス的要素を強めた1958年の改訂版(ボリショイ版)もあまり出来がよいとは言えず、現在、バレエそのものが上演されることは少ない。しかし、コーカサスの民族音楽の和声やリズムをふんだんに用いた音楽は初演当時から非常に好評で、中でも「剣の舞」は世界的な大ヒット曲となった。本日は、その中から5曲が演奏される。

アイシェの目覚めと踊り

アイシェはクルド人の若い娘。ヴィオラのフラジオレット(弦に軽く触れて非常に高い音を出す奏法)を背景にピッコロがソロを吹く「目覚め」に、魅惑的な「踊り」が続く。

山岳民族の踊り

決然とした導入に続き、ハチャトゥリアンの真骨頂とも言うべき荒々しいリズムが続く。クライマックスでは、突如、8分の7拍子という特殊な拍子が現れる。

ガイーヌのアダージョ

美しい主題が、まずはチェロ、続いて第1及び第2ヴァイオリンにより、伴奏なしで歌われる。あとは、曲の終わり近くで、他の弦楽器やハープ、ティンパニが少し出てくるだけだ。

剣の舞

誰もが知る名曲だが、実はこの曲、初演の直前にもう1曲舞曲が必要ということになり、ハチャトゥリアンが指で机を叩いてリズムを探しながら、わずか一夜で作曲されたというエピソードがある。

レズギンカ

スネアドラムの激しいリズムが全曲を貫く活発な舞曲。イ長調の主部に対し、中間部は3度高いハ長調で書かれており、いっそう熱を帯びる。

[作曲年代] 1939～42年 [初演] 1942年12月9日 ベルミ、キーロフ・バレエ団による
[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、アルト・サクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、アルト・サクソフォン、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン)、弦楽5部

ハチャトゥリアン

ヴァイオリン協奏曲 二短調

1940年当時のハチャトゥリアンは、まもなく息子が生まれようというところで、私生活も充実していたが、創作力においても絶頂期にあり、頭には楽譜に書くのが追いつかないほどの音楽があふれていたという。この協奏曲もわずか2ヶ月で作曲された。作曲時から協力していたヴァイオリニスト、ダヴィード・オイストラフ(1908-1974)による初演は大成功で、やがてこの曲は、ハチャトゥリアンの代表作として世界中で演奏されるようになった。現在ではヴァイオリンだけでなく、ジャン・ピエール・ランバル(1922-2000)の編曲により、フルート協奏曲としても親しまれている。

第1楽章 アレグロ・コン・フェルメツァ ニ短調 4分の4拍子 ソナタ形式
 強烈な序奏に続き、独奏ヴァイオリンが力強い第1主題を弾く。第2主題はややノスタルジックだ。再現部の前にはカデンツァが入る。通常、作曲家自身によるものか、オイストラフの書いたもののどちらかが演奏される。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート イ短調 4分の3拍子 三部形式

序奏に続いて、独奏ヴァイオリンがけだるく哀愁を帯びた主題を歌う。中間部は、管弦楽のみの部分に続き、独奏ヴァイオリンが「ソラファソーミ | ファソミファーレ」という音型を繰り返す、民族的色彩の濃い音楽だ。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ ニ長調 8分の3拍子 自由なロンド形式

エネルギッシュなフィナーレ。途中には第1楽章第2主題を変形した旋律も登場して。全曲の統一が図られている。

[作曲年代] 1940年 [初演] 1940年11月16日 モスクワ、ソヴィエト音楽祭にてアレクサンドル・ガウク指揮、ダヴィード・オイストラフのヴァイオリン独奏による

[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、シンバル)、ハープ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

ハチャトゥリアン

交響曲第2番 ホ短調『鐘』

ハチャトゥリアンは、3曲の交響曲を作曲した。第二次世界大戦中のソ連では、ショスタコーヴィチの交響曲第7番『レニングラード』をはじめ、戦争に呼応した交響曲がたくさん書かれたが、ハチャトゥリアンの第2番もそのひとつだ。この作曲家としては異例なほど悲痛な感情が全曲を覆う作品で、演奏される機会はそう多くないが、彼の傑作のひとつとして名高い。

この曲は、まず1943年に一旦完成し、初演も行われたが、翌年、中間楽章の順序を入れ替えるなどの改訂が行われた。さらに、1960年代にも少し手を入れられて、現在の形となった。

曲は、第2楽章(初稿では第3楽章)にスケルツォ的な楽章をもつ4楽章構成だ。副題の『鐘』は、全曲を通じて鐘が印象的に使われていることから、ある音楽評論家が命名したもので、作曲家もこれを了承している。

第1楽章 アンダンテ・マエストーソ

ソナタ形式。冒頭に「ソ♯ - ファ」そして「ファ - レ」という、短3度を下降する音程が現れるが、これはこの曲全体を統一する役割を果たしている重要な音程だ。

第2楽章 アレグロ・リゾルート

三部形式のスケルツォ。楽章を通じてせわしなく刻まれるリズムが特徴的だ。クラリネットのソロをきっかけに中間部に入るが、ここでは民族的色彩の濃い主題を弦が歌う。

第3楽章 アンダンテ・ソステヌート

この楽章は、作曲者によると、怒りのレクイエムであるという。主要主題は、作曲者が幼い頃、母親の歌っていたアルメニア民謡「狩人の歌」から取られている。グレゴリオ聖歌『怒りの日』もあらわれる。

第4楽章 アンダンテ・モッソーアレグロ・ソステヌート、マエストーソ

ファンファーレで始まる序奏に続き、ヴァイオリンが三連符の連続を弾き始めると主部に入り、希望を感じさせるコラル風的主要主題が現れる。大詰めでは、全曲冒頭の短3度音型の音型が再び現れる。

[作曲年代] 1942～43年 [初演] 1943年12月30日 モスクワ音楽院大ホールにてボリス・ハイキン指揮ソヴィエト国立交響楽団による

[楽器編成] フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュホルン、E♭クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、ウッドブロック、シンバル、チューブラーベル、グロッケンシュピール、シロフォン)、ハープ2、ピアノ、弦楽5部

ますだりょうすけ / 音楽評論家。ショスタコーヴィチをはじめとするロシアソ連音楽、マーラーなどの後期ロマン派音楽を中心に、『レコード芸術』『CDジャーナル』誌、京都市交響楽団、東京都交響楽団などの演奏会プログラム、各社ライナーノート等に執筆している。

7/7

7/10

7/12